

<先週の説教から>

『ルカ63 — 荒れ野が園となるために』

武田真治牧師

イザヤ 32:15~20 ルカ福音書 8:4~15

今年も、クリスマス礼拝と燭火礼拝を終えて、皆様と一緒にこの一年、最後の礼拝に集えましたこと、そのように神様が守り、導き、集めてくださいましたことを深く感謝します。この時にイエス様の話された『種蒔きのたとえ』がみ言葉として与えられていることにも御導きを感じています。

たとえ話そのものは4~8節にあるのですが、このたとえ話をイエス様ご自身が説明して下さったのがその後に記されていることは有難いといえます。そこでは先ず、この蒔かれる『種は神の言葉である』と教えてくださっています。

ただ、私たちが簡単に考えてしまうのは、そのような“神様の言葉”がこの地に蒔かれたならば、きっと、そのどんな「種=み言葉」も神様の力によって芽吹き、育ち、花を咲かせてくださる、そして、たくさんの実をならせるものだと思いがちです。それほどに神様の言葉は力のあるものだと。

確かにイエス様は、その種は『生え出て、百倍の実を結んだ』と言われていますし、それがまさに“種=み言葉の持つ力”であると言われていますが、ただしそれはあくまで『良い土地に落ちた』場合であるとも言われています。他の種は『道端に落ち、空の鳥が食べてしまった』『石地に落ち、芽は出たが枯れてしまった』『茨の中に落ち、茨が押しかぶさってしまった』と3つの異なる「土地に落ちた」ことで、結局は育つこと出来なかったと言われているのです。

これは“み言葉を人に伝える”ことの難しさを言われていると受け止められます。即ち、①伝道はいかにたくさんのムダを伴うものであるか、そして②伝道は花が咲き実をならすまでにいかにたくさんの時間を必要とするのであるかを！

そうであるならば、もっと効率の良い蒔き方を為すべきでしょうか？ 或いは、もっと場所や的を絞って種を蒔くべきでしょうか？ そうするようにイエス様はこの『種蒔きのたとえ』を通して私たちに教えておられるのでしょうか？

違うように思います。それならばわざわざ『道端』や『石地』や『茨の中』を詳しく語られる必要はなかったでしょう。これは、み言葉の“種”はどんな場所にも蒔かれていることを何より語っておられます。種は場所を選んで蒔かれているのではなく。むしろ問題は、その種をどう受け取るかだと。即ち、私たち自身の“土壤は大丈夫か？”ということを。

逆に、伝道という点に立って考えるならば、み言葉の種がどんな場所、どのような土壤に巻かれたのか、そして、その種がどう育つかは、その種を蒔く側の私たちが決めたり、見極めたり、判断できることではないということでしょう。それ故に、どのような場所にも、どのような時にも（=時が良くとも悪くとも）今、蒔いているこの“種”が根付いて、芽を出し、育って行くことを願いながら“蒔き続ける”ことではないでしょうか。今日のイザヤ書にありますように「荒野が園になる」ことを望みながら、託されたこの地=この土壤に種を蒔き続ける以外はないということではないかと！

【今週の集会】

*聖書研究・祈祷会 I. 1月7日(水) 20:00
II. 1月8日(木) 10:30

聖書研究：ヨブ記
祈祷主題：2026年、新年を覚えて
担当者：(水) TM (木) UH
祈りに覚える人：ORさん OKさん

【教勢報告】

主日礼拝 男18 女45 計63
祈祷会 I. II. 休会
日曜学校 幼稚科4 小中科6 計10
元日礼拝 男13 女31 計44

【次週礼拝】

1月 11日(日)
聖書：詩編 18:26~35
ルカによる福音書 8:16~21
説教：「ルカ65—もし火をともして！」
武田真治牧師

讃美歌：351(1)、32、280、210、510、
24(1)

【次週當番表】

司式: AS 長老 奏楽: KH 礼拝: HS 長老

献金: AS AT 受付: SM HH

会堂準備: IY OY KS NY

MH

看板: II 週報: KY お花: IK

【次週集会予定】

礼拝前：・日曜学校 ・聖書輪読会 ・求道者会

礼拝後：・お茶の会 ・牧師と語る会

・壮年(新年会)/婦人/ダビデ 各会

67 - 1

週報

2025年度 教会標語

「主につながり、根を張り、枝をひろげて」

2026年 1月 4日

日本キリスト教団 上尾合同教会

牧師 武田 真治

〒362-0041 上尾市富士見2-3-33

TEL&FAX 048-771-6549